

10. ポーランド

鈴木 絵美留

毎回、次はどこかの国の履物ミュージアムを紹介しようか直前までとても悩んでいます。なるべく日本で（日本語で）紹介されていない世界中にある履物ミュージアムをここでは紹介したいと思っていて毎回締め切りが終わると、「次回はここにしよう！」と決めても、執筆しているうちに違う国のミュージアムの話に変化してしまったり、直前で違う国の履物ミュージアムを紹介することになります。「あそこも！ここも！」と紹介したい場所がたくさんあるので引き続き末長くお付き合いくださいませ。今回ご紹介する場所は、当初は別の国の話を書いていたのですが、途中から方向転換をして先にポーランドの履物に関連するミュージアムのお話をしたいと思います。

ポーランドと聞いて思い浮かぶものはなんでしょうか。ショパンが一般的かと思うのですが、靴に詳しい方だと“クラコウ(Kraków) (プーレーヌ(Poulaine))”なんて答えが来るかもしれないですね。もしくはワルシャワの靴とか。クラコウ(プーレーヌ)をご存知でしょうか。中世で流行ったつま先がとっても長く尖った靴のことです。靴の歴史を学ぶ際には必ずこのクラコウ(プーレーヌ)が登場します。つま先の長い靴は12～13世紀頃のピガッシュが知られていますが、ピガッシュの方がクラコウ(プーレーヌ)よりつま先が短いと言われています。このピガッシュは履くことを後に禁止されます。そして14世紀後半にこのポーランドの南の都市クラクフが起源として知られる有名なクラコウ(プーレーヌ)が流行し、15世紀にはフランスやイギリスで、法

律によって着用や製造を禁じられたほど、つま先がとっても長い不思議な履物です。

どうしてそんなにつま先の長い履物がポーランドで流行したのか調べてみると、一説には、カジミェシュ大王の宮廷で14世紀頃に誇示的に先端を伸ばしてみた靴が流行ったのが始まりと言われています。そこからクラクフの職人たちの手で作られ、輸出されて、フランスやイギリスでも流行した模様。ピガッシュやクラコウ(プーレーヌ)の歴史も見えていくととても興味深いですね。両方とも各時代でなぜか着用を禁止されるという運命を持っている個人的には不思議な履物の一種です。



15世紀写本『ルノー・ド・モンターバン』饗宴図の細部。廷臣の足元に、長いつま先のクラコウ(プーレーヌ)。

Bibliothèque de l'Arsenal (BnF), Paris — Renaud de Montauban, Arsenal Ms. 5072-5075 (detail); via Wikimedia Commons (Public Domain). Source: The Age of Chivalry, National Geographic Society, 1969.



12世紀写本『リーベル・フロリドゥス』より。足元には、当時流行の“ピガッシュ” Herzog August Bibliothek, Wolfenbüttel — Liber Floridus, Cod. Guelf. 1 Gud. lat., fol. 42r; via Wikimedia Commons (Public Domain).

そんな靴の歴史の一節の中で重要な位置付けにあるポーランドの都市がクラクフ(Kraków)ですが、ポーランドの南に位置しており、近い国境はチェコ共和国とスロバキア共和国です。最初は私自身、クラコウ(プーレーヌ)の靴の歴史もあるし、履物に特化した博物館が存在するだろうと思っていたのですが、クラクフには特に履物専門の博物館はありません。しかし、クラクフ国立博物館(Museum Narodowe w Krakowie (MNK))にはクラコウ(プーレーヌ)の木型が収蔵されているようです。2025年3月25日から京都国立近代美術館で「〈若きポーランド〉—色彩と魂の詩(うた)1890-1918」展が開催されたのですが、その時にこのクラクフ国立博物館から

たくさんの収蔵品が来日しました。その中に編み上げブーツも展示されており、クラクフ国立博物館にもいくつか履物のコレクションもあるようです。

また、リネク地下博物館(Rynek Podziemny)という、街の中の主要な広場の地下5メートルに作られている博物館で、ここの解説に「革靴が展示してある」と記載があります。クラコウ(プーレーヌ)と名のつく靴が中世に流行したにも関わらず、大々的に靴の展示をしていることを宣伝している博物館が少ない印象を受けます。

ちなみに、首都のワルシャワも靴で大変有名ですね。戦間期(1918~1939)には、2000以上の靴工房があったそうです。また17世紀の諺に「グダニスクのウォッカ、トルンのジンジャーブレッド、クラクフの乙女、ワルシャワの靴(ポーランド語原文: toruńskim pierniku, gdańskiej wódce, krakowskiej pannie i warszawskim trzewiku)」がポーランドの最高のものであげられているくらい、ワルシャワは靴の街ですね。(この時代のクラクフは「靴」ではなく「乙女」が最高なものになっています。)

ワルシャワ博物館(Muzeum Warszawy)には2000点ほどの服飾のコレクションが収蔵されており、そのうち靴は70足ほどあるそう。その中には、キエルマンのボタン付きアンクルブーツのコレクションもあります。キエルマンの工房が設立された1800年代後半、キエルマンの靴の耐久性を宣伝するために工房にいくつかショーウィンドウがあり、水が入った真鍮のバケツに靴が浮かぶ展示があったそうです。おもしろいアイデアですね。

また、ワルシャワ博物館では、過去に靴職人を招き、靴作りを紹介するイベントが開催されました。〈次号へ続く〉